

User's Voice))))

16枚羽根機、四六判機などを含む 多様なスタール機を武器に、 特殊折りの技術で差別化を図る

東洋紙工株式会社

ここに、あまり見かけないスタール紙折り機がある。異様なのは、その第1ステーションの平行折りユニットだ。この部分にやけにボリュームがあるというか、恐ろしく混んでいる。数えてみると、1、2、3、4・・・、羽根が16枚もあるのだから当然だろう。東洋紙工株式会社は、この全国でも数台しかないというスタールT66-16という紙折り機を2台所有している。これだけを見ても、同社が特殊折りに関して、国内有数の技術力を持った会社だということがわかるはずだ。

「当社では、売り上げの半分を特殊折りが占めています。もっとも、他の会社では特殊折りに入る観音折りなどはうちでは普通。巻いて巻いて観音にするなど、当社にしかできないような折りだけを特殊折りと呼んでいますから、他社からみれば仕事のほとんどが特殊折りといえるかもしれません」（常務取締役 高橋克己氏）

そのため、発注も大手印刷会社が多く、「特殊折りの東洋紙工」の名を聞きつけて、東京はもちろん仙台、九州などからも依頼がくるという。確かに、普通の観音や輪転折り出しなど、一般には特殊折りと呼ばれてはいるが、すでに参入しているところも多い仕事では、「安く、早くのニーズ」にも対応している。しかしそうした仕事でも、品質を落とさないことで高い競争力を保っているのである。このような同社の高品質の要となっているのが、16枚のスタール紙折り機と3台のポラー断裁機だ。しかも同社の初めてのスタール機は、国内第1号機（K58）。つまり昭和42年、日本におけるスタール紙折り機の歴史は、この会社から始まったともいえる。きっかけは、ハイデルベルグ（当時は印刷機械貿易）の大阪ショールームを、一人の若い男性がのぞき込んだことだったのだが……。



スタールT66-16は、山数の多いジャバラ折りに威力を発揮する



代表取締役社長 高橋康雄氏

用紙販売業として創業。 スタールで特殊折りに特化

同社は昭和27年、株式会社相互紙業として大阪市此花町で産声を上げた。その名のとおり当時は用紙販売業で、扱っていたのは洋紙・クラフト紙および包装紙などに使われる色ロール紙等である。紙に付加価値をつけるために断裁が必要だったことから、昭和33年には小さな断裁会社を国産断裁機、職人ごと居抜きで購入した。

ところが、もともと自社の用紙の付加価値を高めるために始めた断裁業が意外な成長を遂げ、昭和37年には当時としては非常に高額なポラー断裁機を導入した。その理由は、当時、自動寸法出しができる全自動機はポラーだけだったからである。全自動なら職人の技術に頼らなくても操作ができると判断したのだ。こうした事業の拡大に伴い、同社は同じ年、思い切りよく東



その信頼性の高さはもちろん、複数機を仕事により組み合わせて効率的な作業を行う目的で、折り機はスタールに統一されている

洋紙工株式会社に社名変更をした。

その後、国産の手差し紙折り機を導入して折りにも進出。当時、大阪の中心地の天満にあり、競合他社が少ないという地の利を生かし、急成長を遂げた。

そんな昭和42年のことである。このとき、当時の印刷機械貿易の大阪ショールームには、ドイツから輸入されたばかりの全自動紙折り機が置かれていた。もちろん国内1号機で、売ろうにも販売する側も操作の仕方を試行錯誤していた時である。

そのピカピカの機械を、ガラス越しに眺めていたのが、若き日の同社代表取締役社長、高橋康雄氏だった。高橋社長は、ショールームに入るや「何をやる機械だ?」と聞いたのである。

こうして、当時国産機の3倍以上、家が1軒買えるほどだったというスタールの全自動紙折り機は、同社の工場に導入された。

「とにかくあの頃は、完全自動の機械というのはスタールしかありませんでした。この機械は、導入してからすぐにスーパーのチラシなどの仕事で活躍しましたよ。ええ。当時は私が機械を動かしていました。今でも折り機は結構さわるんです（笑）」（高橋社長）

実際、当時スタール機を販売した担当営業は、詳しい操作方法などを、高橋社長にいろいろと教わたったのだという。

さて、スタールとポラーという現在につながる両輪を手にした同社は、高

度経済成長の波に乗り、さらに順調な発展をつづけた。

昭和45年の大阪万国博覧会では、大量のパンフレットを受注。四六全判のパンフレットの観音折りなどの仕事も入り、この時は、毎晩2時、3時までスタールを稼働していたという。当時小学校高学年だった高橋春雄専務取締役、小学校中学年だった高橋克己常務取締役役も、小遣い銭稼ぎのために折りを手伝った。

「兄は、長男ですから夏休みなどは手伝うのが当たり前。私は万博の時、確か戦艦大和のプラモデルが買いたくて手伝っていたんです（笑）」（高橋克己常務）

またこの頃から、大型機スタールT107などの特殊機を次々に導入。だんだんと「よそでできないものでも、東洋紙

工に持っていけばできる」という評価を確立していく。平成5年には、それまで3つに分かれていた工場を現在の東大阪工場に統合。現在の体制が完成した。

ラウンドフィーダ+プレスデリバリが 高い生産性を支える

現在同社では、16台のスタール紙折り機が稼働している。もっとも新しいものは、今年導入されたTD66。「スタール機は完成度が高い。ですから新しい機械を買っても、まったく不安感はありません。国産機はロングランすると狂いが出ると聞きますが、スタールなら一度セットすればあとは大丈夫」（高橋春雄専務）

「国産機だと怖くて準作業員任せにできませんが、特殊折りの多い当社でも、スタールなら熟練したオペレータが最初だけセットすれば、あとは準作業員に任せられます。つまり、オペレータが複数台を見れるため、生産性も上がるわけです」（高橋克己常務）

さて、同社が導入しているスタール機にはいくつか特徴がある。まず、すべてにラウンドフィーダを装備していること。また、これもすべてにストリームシングルプレスデリバリを装備していることである。

ラウンドフィーダは、輪転折り出し用紙を含め、さまざまな折りに対応できるほか、仕事を途切れさせることなく流せるのが特徴。プレスデリバリは、



今年導入されたTD66を含め、同社のスタールにはすべてラウンドフィーダ、ストリームシングルプレスデリバリが装備されている